

東邦大学の文化

田上 恵

東邦大学医学部麻酔科学講座（佐倉）教授

先日、母校である金沢大学医学部千葉在住の卒業生の集まりがあった。その折の出席者の約7割は、卒業後すぐに母校を離れ、千葉大学等に入局した人達であり、関東出身者が多かった。

その時に「母校愛」についての話になった。ちょうど昨年、金沢大学は設立150周年を迎えたこともあったが、私が10年以上東邦大学で過ごさせていただく中で、強く感銘を受けたことの1つが、東邦OBの母校に対する深い思い入れであったので、興味深い話題となった。

金沢というのはご存じのように加賀百万石の城下町であり、明治以降には金沢大学の前身である四高（旧制第四高等学校、官立旧制高等学校のナンバースクールの1つ）が設立された土地である。伝統ある独特の文化の下に、四高時代からの学生を大切にす土地柄であったので、それぞれに青春を謳歌した大学生時代であった。そのことに対するノスタルジアは皆強く持っているものの、さて「母校愛」というと果たしてどうか？と苦笑してしまうのが、前回の集まりの大方の者の感想であった。

そこが、東邦大学との違いかもしれないということが、私がかねがね感じていたことであった。

2000年4月に東邦大学に赴任した当時、私は諸先輩方の母校に対する思いの強さに、大いに感銘を受けたことを思い出す。そして13年間一緒に仕事をさせていただいた中で、気が付いたことがある。それは、東邦大学独自の「文化」ということだ。

国公立系の大学にはない、学祖による建学の理念、その理念に基づいた長年にわたる教育の歴史、その歴史の中で

育まれた団結の心。そういったものすべてが東邦大学の「文化」であり「母校愛」の源であると感じ、うらやましくさえ思った。

普段、私は学生や若い医師達と接する中で、彼らの医師としての資質を高く評価しているのだが、そういったものも、大学の文化の中で6年間を過ごすことで培われたものであろう。私は常々彼らに「そのことに誇りを持って」と話している。

苦言とまではいかないが、彼らがコンペティションをしつながらないという点が気になる。これは争いを好まないという大きな利点ではあるのだが、時には弱腰になり弱点となり得ることも、同様に彼らに話している。

ここ数年来、千葉地方裁判所は全国に先駆けて、複数鑑定人制度を導入している。また最近では、法曹界と医学界の「言葉の共通化」を図ろうとしている。これは鑑定の際に、言葉の持つ重みを共通化することが目的である。

私もその委員を務めていた関係から、法曹界の人達と話す機会が多くあった。その折に彼らから、彼らの基本は「良識」であるという話を聞かされた。「良識」というのは、時代、地域（国）、民族等により異なり、変化するものだ。

これに対して私は、医療の基本は「良心」であると彼らに答えている。「良心」は普遍・不変である。私は日頃若い医師達に「医療は常に“良心”で行い、迷った時には“良心”で判断するように」と伝えている。

東邦大学学祖の気宇壮大な理念の下で作られた「文化」の中に、その「良心」が存在していると思うのである。